
ニネヴェ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二ネヴェ

【Nコード】

N3211R

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

アッシリア帝国の首都二ネヴェ。圧倒的な軍事力を誇ったこの国の首都はどうして陥落したのか。今もアッシリア人はアメリカに三万程いるそうです。

第一章

ニネヴェ

随分と惨いレリーフである。

戦いと虐殺。その二つから成っている。

首や手足がうず高く積み重ねそれを誇示するかの様だ。そのレリーフはアッシリアのものである。

この国は圧倒的な軍事力で以て大国となった。そしてだ。

その統治はあまりにも苛烈であった。恐怖で他民族を支配していた。

反逆者には容赦することなく手足を切り皮を剥いだ。そうして周辺民族を殺戮し街を消していった。その中にはバビロンもあった。

バビロンはアッシリアに二度攻められた。一度目は建物を全て破壊され二度目は川で流された。当然民は殺戮された。しかしであった。

彼等は諦めずにアッシリアへの反抗を続けていた。

「アッシリアを何時かは倒す」

「奴等を一人残らず殺してやる」

こう念じながらだ。彼等は戦っていた。そうしてだ。

アッシリアに対して攻勢に転じることができた。それは彼等だけではなかった。

これまでアッシリアの圧政、虐殺に苦しめられていた全ての者達だ。立ち上がったのである。

メディアもいた。スキタイもだ。そしてその他の多くの国家や民族が集まっていた。皆アッシリアを滅ぼさんとしていた。

「アッシリアがいる限り我等に未来はない」

「殺されるよりもだ」

「殺せ！」

彼等はこう考え叫んでいた。

「奴等をこの世から消してしまえ！」

「そして我等に平和を！」

「安寧をだ！」

強大な軍事力を誇るアッシリアに対して向かいだ。その王都ニネヴェに向かつて進軍していた。そして遂にその街を囲んだのであった。

街は城壁に覆われていた。まさに城塞都市である。

その広大な城塞都市をだ。今多くの国家の大軍が包囲していた。

「さて、それでだが」

「どうして攻める？」

「力攻めでいくか、まずは」

連合軍の将の一人がこう提案した。

「我等の数は圧倒的だしな」

「そうだな。如何にアッシリアといえどな」

「この大軍に勝てはしないな」

「それではだな」

こうして正攻法があつさりと決まった。そのうえでだった。

連合軍はとりわけ城壁が広く一直線の形になっている東側に戦力を集中させた。そこが最も攻めやすいからだ。そうしてであった。

大兵力で一気に攻める。しかしだ。

アッシリアは軍事力で大きくなった国だ。その守りは尋常なものではなかった。

攻めるとだ。当然迎撃が来た。それはかなりのものだった。

上から弓矢だけではなかった。煮えたぎった油や湯、それに石や木が落ちてくる。それを何とか凌いで城壁に近付いてもだ。

今度は剣で斬られ落とされる。その守りは憎たらしいままであった。

「まずいな、力攻めは意味がないか」

「想像以上に守りが堅い」

「流石アッシリアと言つべきか」

「かなりの強さだな」

賞賛の声さえ出していた。

「この街、攻め落とすのは容易ではないぞ」
「しかもだ」

ここぞだ。彼等を焦られる案件があった。

「エジプトが来ているぞ」

「あの国がか」

「来ているのか」

「そうだ、来ている」

アッシリアの数少ない同盟国である。かつては敵対していたがそのバビロニアやメディアは伸張するに従い手を結んだのだ。そのエジプトがというのだ。

「我等の背を脅かしてきている」

「ではこのまま攻めあぐねていてはか」

「後ろからやられ」

「アッシリアは生き残る」

彼等にとってそれはまさに最悪の事態であった。

「奴等が生き残ればまた、だ」

「また殺され奪われる」

「地獄の日々がまた来るのだ」

「それだけは駄目だ」

「絶対にだ」

アッシリアへの恐怖は彼等の中に染み渡っていた。今回の連合も攻勢もだ。その恐怖への裏返しだった。そうなれば余計にであった。彼等は自分達の安寧の為にアッシリアを滅ぼさなくてはならなかった。さもなければまた圧政と虐殺の日々だった。まさにそれだけではであった。

「あの街を早く陥落させるんだ」

「アッシリアを滅ぼせ」

「何があってもここで滅ぼすんだ」

「そうだ、ここからだ」

しかしだった。守りは堅い。彼等は真剣に最悪の事態を想定していた。

第二章

「このままではエジプトが来るぞ」

「只でさえ攻めるのが長引いている」

「こちらの士気も心配だ」

「しかも敵の士気はまだ高い」

伊達に戦闘国家ではなかった。彼等は劣勢であつても戦意が萎えることはなかった。彼等にはそうした感情は無縁であるかの様である。

「どうする？力攻めは駄目だ」

「それではどれだけ攻めても意味がないぞ」

「このままアツシリアを生かしておけん」

「滅ぼさなくてはならないが」

「しかし」

それでも良かった。やはり攻め落とせない。少なくとも正攻法ではだ。

攻めあぐね焦っていた彼等だった。しかしだ。

ここである者がだ。こう言ったのであった。

「そうだ、ここはだ」

「ここは？」

「何か考えがあるのか？」

「ある」

「こうだ。周りに答えたのだった。

「あるからこそ言った」

「ではそれは何だ」

「どうするのだ、それで」

「一体」

「まずは火を焚く」

「そうするというのである。」

「城壁の傍でだ。とにかく火を焚く」

「火をだろ？」

「それをか」

「焚くのか」

「そうするのか」

「そうだ、無数の篝火を置く」

具体的にどうするかも述べられた。

「そしてそのうえでだ」

「それからどうするのだ」

「火を焚くだけか？」

「まさかとは思うが」

「後はそれからだ」

ここでは多くは言わなかった。

「いいな、まずは火だ」

「それであの街が陥ちるのか」

「ニネヴェが」

「そうだ、陥ちる」

それは間違いないのだという。

「だからだ。ここはだ」

「とにかくやってみるか」

「そうだな。どのみちこのままではあの街は陥落させられない」

「ではやってみる方がいい」

「まずはそれからだな」

「その通りだな」

こうしてだった。彼等はとりあえずはそうして陣中で火を焚くことにしたのであった。それはアッシリア側からも見られた。

彼等はそれを見てだ。まずはいぶかしんだ。

「何だ、あいつ等」

「バビロニアの奴等らしいが」

「一体何のつもりだ？」

「何をしているんだ？」

城壁の上からだ。いぶかしみながら言うのであった。城壁を駆け上がる為の傾斜路があった。しかしその一角にだった。火がかけられる。それは一つではなかった。

連合軍の兵士達は傾斜路に次々と火を投げ込む。それは忽ちのうちにも近寄れない程になった。

「何をしているんだ、奴等は」

「火なぞ燃やして何をするんだ」

「昼だというのに灯りが必要なのか？」

「わからん」

「何を考えている」

アッシリアの兵士達はいぶかしむばかりであった。火には次々と木やそういった燃えるものが投げ込まれ衰えさせられない。そしてだ。

アッシリア側はその炎に近寄れなかった。熱さ故にだ。しかも連合軍がどうしてそんなことをしているのかわからなかった。いぶかしむばかりだった。

第三章

その大規模な焚き火は続いた。何日もかけてだ。するとだ。

「おい、城壁が」

「あ、ああ」

「何だ？脆くなってきてないか？」

「そうだな」

アッシリアの将兵達がそれに気付いたのだ。

「このままではだ」

「城壁が」

「まずいぞ」

メソポタミアの城壁は土を干乾させた煉瓦によって造られている。そこに熱を与え続ければどうなるか。連合軍はそれを知っていたのだ。

「土は乾かす」

「そうすれば脆くなる」

「成程、それでか」

「そういうことか」

「そうだ。これならいける」

こうだ。バビロニアの將軍の一人が言った。

「あつシリアの城壁もだ」

「あの高く厚い城壁もだな」

「これで脆くなり」

「そして破ることができる」

「そしてだ」

重要なのは城壁を破ってからだった。まさにそれからだった。

「アッシリア人達を一人残さずだ」

「ああ、殺す」

「今までの怨み晴らしてくれる」

「そうしてやるぞ」

「絶対に」

彼等は復讐と殺意に燃えていた。それが彼等を戦わせていたと言っている。

そしてだった。遂に城壁が壊れた。

その瞬間にだった。連合軍は動いた。

「全軍攻撃だ！」

「殺せ！」

「殺せ！」

最早それは命令ではなかった。

「アッシリア人を殺せ！」

「今までのことを思い出せ！」

「許すな！何があるうとも！」

「滅ぼせ！」

「この地上から消し去れ！」

こう叫んでだった。剣を手にして一斉に斬り込む。こうしてだった。

ニネヴェエは殺戮の場と化した。アッシリア人達は兵士も市民も次々に殺されていく。しかもその殺され方はあまりにも凄惨なものだった。

ばらばらにされる者、柱にくくりつけられ弓矢の的にされる者、

業火の中に投げ込まれる者、皮を剥がれる者、実に様々だった。

「奴等がしてきたことをそのまましろ！」

「いいか、容赦するな！」

「皆殺しにしろ！」

こうした言葉を合言葉にしてだ。殺戮を続け。

ニネヴェエは燃え続けた。何週間も。そうして完全に廃墟になったところだ。

チグリス河の流れを変えてニネヴェエの廃墟のところに流してだ。

街の跡を何もかも洗い流したのである。そうしてしまったのだ。

河の流れが元に戻りそこにあったのは。ただの荒地だった。それを見て連合軍の者達は言うのだった。

「これでいいな」

「ああ、アッシリアを滅ぼし」

「街を消してやった」

「奴等が今までできてきたことを」

「我等がやり返してやった」

「こうしてだ」

「こう話すのだった。

「これでいいな」

「そうだ、アッシリアを消した」

「街も何もかも」

「我等がされてきたことをしてやった」

「復讐が今完全に終わった」

彼等はこのことを心から喜ぶのだった。

後にクセノフォンがニネヴェエの跡地に来た。しかしだった。

そこには何もなく通り過ぎただけだった。彼がそこがニネヴェエだと知ったのは後になってからだ。

これがアッシリアの最期である。この国は怨みを買って復讐によってこの世から消えた。アッシリア人自体は存在している。何とアメリカにまだ約三万人の未裔達が存在している。他の国々にも残っている。しかし彼等は祖先達のあまりもの残酷さはない。そして世界帝国を築くことは今に至るまでない。そうした意味において。アッシリアは完全に歴史から消え去ってしまったのである。復讐を受けてだ。

ニネヴェエ

完

2
0
1
0
·
1
2
·
3
1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3211r/>

ニネヴェ

2011年3月2日22時10分発行